

当事者部門受賞者

「自立」「自活」を掲げ、夢と希望を持って生きる当事者自身による起業のパイオニア

佐々木 実(ささき みのる)さん 71歳【北海道浦河郡】

(社会福祉法人浦河べてるの家 理事長 / 有限会社福祉ショップべてる 代表取締役社長)

“べてる”、そのはじまりに、佐々木実さんがいる。1978年、統合失調症で7年間の入院生活ののち、佐々木さんは浦河赤十字病院精神科病棟を退院。その退院祝いの場で、佐々木さんが、「これから自分たちはこの町でいっただうやって生きていっただらいいのだろう」と発した言葉をきっかけに、『社会福祉法人浦河べてるの家』を中心とした当事者主体の取り組みが発展していった。過疎地域において、当事者自身による自立への長年の功績が高く評価された。

●「商売をしよう!!」貯金10万円を元手に起業

退院後、行き場がなかった佐々木さんが、ソーシャルワーカーの向谷地 生良(むかいやち いくよし)さんと暮らし始めたのをきっかけに、統合失調症の当事者らと共同生活が始まった。「当時は、生きることばかり、自活することばかり考えていた。」という佐々木さんがコツコツと貯めた10万円を出資し、仲間らと地元特産品の日高昆布の下請けから始め、現在では自分たちで製造・販売をしている。介護用品の販売にも取り組み、当事者の雇用機会を拡大、現在も『有限会社福祉ショップべてる』代表取締役社長をつとめている。



佐々木 実さん

●現実の苦勞を取り戻す『浦河べてるの家』

志を同じくする支援者や当事者らとともに、2002年、『社会福祉法人浦河べてるの家』を設立、当事者の理事長が誕生した。当事者主体で活動に取り組み、健常者の職員はあくまで裏方で、何かあれば当事者に相談するという。

「昔は、精神障害者は忌み嫌われていたが、現在は地域の方が理解してくれるようになった」と佐々木さん。地域で当事者が問題を起こせば、支援者ではなく、当事者の仲間が謝りにいき、地域の集まりにも当事者が参加し、話し合いの場を設けてきたという。

当事者同士で話し合いながら、さまざまな問題を乗り越えてきた姿勢は受け継がれ、現在では数多くのミーティングが行われている。「弱さの情報公開」として、自他の弱さを伝え合い、困ったときにはSST(生活技能訓練)で練習している。当事者が自身の症状を研究というアプローチから深めていく『当事者研究』も生まれた。

「病気や生きづらさがあっても、保護されるだけでなく、自ら『現実の苦勞を取り戻す』ことが大事」と佐々木さん。

●「佐々木社長みたいになりたい」憧れであり、希望

佐々木さんは、27歳で統合失調症を発症し、退院後も薬をやめて、入院するということが数回あった。現在は症状をコントロールしながら、服薬の大切さを若い当事者らに伝えており、お手本になっているという。



SST(生活技能訓練)の様子
「困ったら練習」「わからなかったら練習」と自身の弱さや課題に向き合う。



浦河べてるの家

【浦河べてるの家 WEB サイト】 <http://bethel-net.jp/>